

北河賢三著

『戦後の出発』

文化運動・青年団・戦争未亡人』

評者：松尾 純子

1

戦後半世紀を経て、「戦後とはなんであったのか」が改めて問われている。こうしたときこそ、その原点に立ち返って再検討しなければならない。そう考える方々にはぜひ本書の一読を勧めたい。

本書は、1995年に刊行が開始された『AOKI LIBRARY 日本の歴史』全32冊中の1冊にあたる。本シリーズの趣旨は「各時代ごとに特定のテーマを選んで、20世紀歴史学の成果をふまえて新しい視点からアプローチする」とされ、近現代で11冊、そのうち現代だけで5冊を占める（『青木書店出版図書目録』2001年版）。

通史的叙述の体裁をとらないというのがシリーズの方針なのであろう。本書でも、副題にあげられているようなこれまで未開拓だった領域から、主題の「戦後の出発」の意味を問い直すことに叙述が限定されている。

著者の北河賢三氏は1948年に生まれ、早稲田大学の教授である。戦時期日本の文化運動や占領期の青年団運動などの調査分析に多くの業績がある。本書は、これまでに発表された論文と1998年12月に早稲田大学でおこなわれたプランゲ文庫展に携わるなかでのシンポジウム報告や記録集への論説発表をもとにして書き下ろされた（「あとがき」）。

本書は以下の3章で構成されている。

章 文化運動の昂揚

章 戦後青年団の出発

章 遺族運動と戦争未亡人

著者自らによる本書の位置づけは、「戦後の文化運動、再建された青年団の活動と青年たちの言動、遺族・未亡人の動きの検討を通じて、主として、敗戦後の社会と地域文化の様相をあきらかにしようとするものである」（「はじめに」）。また、こうした個々の領域に立ち入って「戦後の出発」の特徴を照射するにあたって、3つの点に留意したという。第1点は、戦中と戦後の連関で、“連続か断絶か”ではなく、具体的な組織と運動に即して、一定の時間幅の中で連続と変化の総体として特徴を判断する。第2点は、未亡人問題などこれまで正面から論究されることが少なかった戦後の「暗部」に光をあてることによって、戦後社会の状況と戦後の経験の意味を鮮明にする。第3点は、敗戦と占領政策のもとで生じた民衆の間の確執や対立、民衆意識自体に生じた大きな亀裂を検討する。いずれもこれまでの研究状況に対する批判を含む重要な点である。これらの留意点を読み手としても念頭におきつつ、内容紹介にうつりたい。

2

敗戦後、戦前とはけた違いの数の文化団体が続々と結成された。それまで文化運動とは無縁だといわれていた土地や職場でも文化団体が生まれたのである。集った人びとは、演劇、ダンス、音楽会、読書会、各種の講演会・討論会などに熱中した。運動の盛り上がりは、戦後2、3年のあいだ続いた。I章では、こうした文化運動の性格を実証的に明らかにすることに力が注がれている。数多くの文化団体（郡山文化協会・石川県文化懇話会・長野県の静話会ほか）が丹念に取り上げられている。具体的な組織や運動の性格が検討され、運動にかかわった人びとの意識が明らかにされている。それによって、

この時期の文化運動全般の特徴が描き出された。要点を挙げれば次のようになる。

担い手という点から文化運動を整理すれば、青年団・婦人会、地方文化人主導の地域の文化団体、社会教育行政機関・社会教育団体、労働組合文化部・職場サークルとなる。～には疎開文化人がかわりをもつことが少なくなかった。

これまで、文化運動を指導したのは、戦前・戦中の「抵抗派」知識人・文化人であるかのように考えられてきた。だが、それは一部に過ぎず、大半は戦中の翼賛文化運動とかかわりをもっていた。「文化国家」が敗戦後の合言葉になるなかで、引き続き「文化人」として運動を指導・支援した。戦中と戦後の活動とのつながり方について、彼らが発言している例は少ない。

翼賛文化団体の延長のようであった文化団体も、その後の動きを確認すると、1、2年のあいだに公職追放などの外部的な要因と内部の対立などを契機に変化がみられ、世代交代も起こっている。したがって、看板のぬりかえや便乗型があったとしても、それが主流ではない。

社会教育機関・団体には、戦後の「混乱」や「荒廃」に対する危機感が強く見られる。秩序の安定と国民統合のために社会教育を重視し、文化運動を推進する面があった。

地域の青年たちが文化団体を組織し活動した根底には、「知りたい」という強い思いがあった。死ぬことばかり考えていた自分が、今後どう生きたらよいのかといったことをはじめとして、「昏迷」からの脱出がめざされた。また、美しいもの・「文化」的なものへの渴望や憧れがあった。

つまり文化運動とは、敗戦後の混沌のなかで拠り所を見失った人々が自己を立て直し、“世界”を把握するための指針を求める、意識的・無意識的な“運動”だった。したがってそれは、

なかば不可避免的に、試行錯誤の連続と焦点の定まらない総花的なものになった。革命から秩序維持まで、さまざまな潮流が混在し、多様さといまじさを含みながらも、昂揚が見られたところに特徴があったといえる。

戦後の文化運動は、総力戦と敗戦の結果もたらされた混沌と精神的空白という状況のもとで花開き、その多くは数年で終息していった。1948年ごろには文化団体の消滅や運動の衰退が伝えられている。公民館の整備と社会教育行政の本格化、疎開文化人の中央復帰、労働者の大量減首とレッドパージ、専門的文化・芸術集団の確立と商業的娯楽の提供など、政治・社会状況の変化も、運動衰退に大きく作用した。

これまでの研究では、戦後の文化運動を「大正デモクラシー」や自由民権運動と結びつけて高く評価するものと、「お祭りさわぎ」と否定的に評価するものにと大別されてきた。そのなかにあって、以上のように、全体的な見とおしを示したところに章の大きな意義がある。なお、その限界を次のように指摘している点は重要だろう。「地域の青年・文化人が主導する文化運動が、どれだけ地域社会の生活の現実と切り結び、その変革に向かおうとするものだったのかという点からすれば、それが主潮ではなかったというほかない」(55頁)。東白文化連盟の関川信喜や広島山代巴が、稀少な事例として挙げられている。

章では、従来の青年団史や社会教育史とは視点を変えた形で、青年団が取り上げられている。章の冒頭には、次のような3つの課題が設定されている。青年団の再建過程とその後の活動を検討することによって、地域における「戦後の出発」の様相を明らかにする。青年たちの戦後意識と“戦後の青春”の様相を明らかにする。再建から2、3年後に問題となった青年団の再編成の過程とその意味を明らかにす

る。つまり、力点はあくまで「戦後の出発」の特徴を見出すことにある。おもに使われているのは、長野県下伊那地方青年団の資料だが、非常に丹念な分析がなされ、論点は多岐にわたる。以下はその要約である。

戦争末期の青年団は戦争や銃後活動への動員により、青年団固有の事業は著しく制限された。青年団が担ってきた祭礼の行事や娯楽は、人手不足と「時局」のために中絶した。一方で「慰安」重視から演芸会がおこなわれ、例年にはない「やくざもの」が演じられる場合もあった。

戦時期の青年団は、大日本青少年団に統合されていた。1945年5月大日本学徒隊、6月国民義勇隊の結成にともない、戦時青年団は解体した。しかし、地域青年団の組織は多くの場合存続した。

戦争末期においてなお戦意高く、敗戦の報をほぼ一様に衝撃的に受けとめたのが、空襲の被害を被らなかつた農村部の青年に顕著な傾向であった。敗戦後、同世代の仲間には多くの戦死者を持つ青年には「英霊に済まぬ」との心情が強く、心にわだかまり続けた。敗戦と占領政策のもとで否定の対象となり、しばしば「戦犯」呼ばわりされた復員者たちも、世間の「冷淡な仕打」に反感を募らせた。彼らにとって、侵略戦争であったと認識することと、その戦争の戦死者や元兵士への態度・処遇や向き合い方とは別問題だった。青年たちには、自分たちを戦争に駆り立てた上の世代への戦後の態度に対する反発もあった。このように、敗戦後の「民衆意識」には、大きな亀裂があった。

以上の確執・葛藤、反発とともに青年たちの戦後意識を特徴づけるのが、「虚脱」とニヒリズムである。それらは上の世代には退嬰的態度と映ったが、そこにある自省的態度と懐疑精神こそは、「だまされた」という怨恨感情にとどまらない可能性をはらむ、戦争と敗戦の経験から

獲得した、貴重な戦後精神だった。虚脱と不信と懐疑のなかで生まれた批判の眼が、戦後の青年たちの運動を支える原動力の一つとなり、その後のかれらの生活態度と生き方を規定した。その意味で、戦後の「暗部」にこそ戦後精神の核心があった。

戦後青年団はさしあたり戦前型青年団への復帰という形をとった。組織化の過程で、綱領の「国体護持」の語は短期間で消えたが、戦前から続く組織面の網羅主義・修養主義・郷土主義・祭祀を中心にすえるあり方などが問題にされることはあまりなく、後に問題化した。

青年たちが最初に取り組んだのは演芸会だった。演芸会は、祭りの余興・村民慰安・引揚者援護資金募集などを趣旨にしばしばおこなわれた。演目の代表は「やくざ踊り」で、「低級」「頹廢」などと批判されながらも大流行した。青年たちにとって、「やくざ踊り」に興じる「解放感」は、戦争と敗戦の苦い経験と表裏一体のものであり、抑圧され、みじめだった青春の取り戻しを体現するものであり、演芸会一つにも「明」と「暗」の両義的な性格があった。

戦後青年団の特徴の一つは、男女青年団合同の活動が著しく増え、両者を合体した組織も徐々に増えていったことである。それにとともに新たな男女観の確立が問題となり、それを阻む現実が目が向けられた。

家庭内の男女関係・女性の地位は容易に変わらなかったが、「女性解放」「家庭の封建性」批判の言論が噴出した。とりわけ女子青年たちのあいだには「解放」への希望と期待が高まり、指導的な立場の女子青年たちは積極的に発言するようになった。GHQの社会教育政策は、最初は講習会を通じて地域の青年・婦人、とくにその幹部たちに一定の影響を及ぼした。

「民主化」への関心と期待が高まる一方で、女性青年たちは、戸惑いやもどかしさ、また現

状打開の困難を感じ、それを率直に表白し、また日常生活における時間の余裕のなさと生活の合理化の必要を強調した。しかし、農村女性をとりまく環境は敗戦後7年を経てもほとんど変わらず、そのなかで彼女らは「農村女性」として生きる途を模索して葛藤し、一方では農村をはなれて都会生活を志向するものも急速に増えた。

青年団は地域社会において男女が公然と一緒に活動できる数少ない場であった。青年男女の交流の拡大が、戦後青年団活動を活性化させた一因であった。その交流を危惧し危険視する傾向は根強かったが、女子青年の活動と発言権の増大はめざましく、時の経過とともに周囲もそれを認めざるをえなくなっていった。交流機会の飛躍的増大と男女交際の自由を推奨するGHQの政策から、青年たちのあいだには恋愛への関心が一気に高まった。都市・農村を問わず青年たちの恋愛結婚志向は高まったが、とりわけ農村部ではその実現を阻む障壁は多かった。

青少年の不良化や犯罪の激増、性病の蔓延は、じっさいには戦時下において急速に進行していたのだが、いっさいの原因が敗戦にあるかのように受けとめられ、青年男女の性的「混乱」「退廃」も同様に問題視された。

青年団活動は、1947、48年には全国的に行きづまりを見せた。青年団発足後の“祝祭”と無我夢中の活動ののちに、青年たち自身は自己認識を深めていった。“戦前”を引きずってきた自己の姿をみつめ、それに向き合おうとするところに、はじめて“戦後”が始まった。網羅型組織が内部から批判され、同志・同好会型組織に向かいつつあった。ちょうどそのころにGHQの社会教育政策が本格化し、その影響下で青年団の再編成がうながされた。CIE・軍政部によって提唱されたグループ制は、折衷的な形態ではあれ、かなりの青年団において受容さ

れ、地域の年齢網羅型の大集団から興味・関心にもとづく小集団への移行の動きが顕著になった。また、この有志グループ制の経験が、1950年代の共同学習やサークル・生活記録運動を準備する役割を果たした。

章では、遺族運動と未亡人運動の交錯および戦争未亡人の戦後意識が検討されている。2つの運動の関係が意識的に追求された研究はこれまでにない。戦争未亡人についての研究もごく少ないなかで、敗戦後の民衆意識を考えると、この側面からも分析されているところに、画期的な意義がある。要約に移ろう。

敗戦と占領のもとで、戦争未亡人にとって、戦後は一面では戦前の「英霊の妻」からの解放の始まりであるとともに、苦難の始まりであった。遺族運動は、彼女らを中心とする戦争犠牲者遺族同盟組織化の動きから始まった。それを背後でささえたのは、武蔵野母子寮の寮長牧野修二であった。

遺族同盟結成に向けての準備活動は、武蔵野母子寮を中核とした、集会や結社について未経験な未亡人たちによって担われた。1946年6月には結成大会が開かれ、男性遺族も含め各地から代表1000名余が参加した。しかし戦争犠牲者という自覚から生活権と平和を要求する遺族同盟に対し、英霊の顕彰と遺族の福祉の増進を中心におく男性遺族主体の別勢力は、47年11月に日本遺族厚生連盟を結成した。戦争犠牲者遺族同盟は49年7月に解消し、中心は未亡人運動に向かった。

各地の遺族会は、男性遺族や地方世話部などの働きかけで設立されたケースが最も多い。敗戦後の扶助料打ち切り・世間からの白眼視・公的慰霊祭の禁止・忠魂碑の撤去などで「受難」者意識を共有する遺族同士が結束し遺族会を結成した。

都道府県単位の遺族会が1946、47年に組織化

を進めたのに対し、未亡人会の組織化は遅れた。全国188万人の未亡人の3割を占める戦争未亡人が組織化を主導した。未成年の子どもや親を抱えた21～40歳の未亡人（その約半数が戦争未亡人）が、統計的に見ても最底辺の生活を余儀なくされた。未亡人会は、切実な生活上の必要と互いの境遇への共感から相談・協力する過程で生まれた。しかし、多くの場合、その置かれた状況から、未亡人自身による組織的活動は困難であり、県や村の指示・指導で組織されたケースも少なくない。また鹿児島県女性連盟のように女性解放運動を推進するなかで連盟内に未亡人部を設置した例もある。

日本遺族厚生連盟は、未亡人問題の深刻さが指摘され各地で運動が起こるとこれに対応せざるを得なくなり、婦人部設置を決めた。連盟は戦争未亡人を多く抱え、対外的にも、とりわけGHQとの交渉において未亡人・遺児問題を前面に押し出す必要があった。だが男性中心の遺族会が戦争未亡人の窮状を救うために積極的に動くことはまずなく、むしろ「嫁は他人」と冷淡であり、戦前以来の「忍従」を求め抑圧的な場合さえ少なくなく、彼女らは婦人部に属しながら、遺族会とは別に未亡人会を組織して、母子家庭の苦しい生活を救済するための活動をおこなう場合もあった。戦争犠牲者遺族同盟を支援した同胞援護会は未亡人会の組織化を支援した。遺族運動や未亡人運動は当初の労働運動のように奨励された運動ではなく、彼女らにとっては運動を起こすこと自体が至難であったが、運動はそれだけ必死なものとなった。

敗戦後、カストリ雑誌のネタから小説の題材、各種調査などで未亡人の再婚問題は頻繁に取り上げられた。婦人雑誌などが未亡人の生活や訴えを取り上げるのは1948年から、実態調査の報告書が出されるのは1949、50年からである。戦争未亡人の手記では「忘れられ」、「黙殺さ

れ」、「圧迫」された存在として、自己の存在が意識され、国家・社会に対する呪詛の思いは強い。組織労働者と自分たちの境涯を引き比べた訴えも少なくない。再婚問題をめぐる世間の未亡人観と当人たちの意識とのギャップや周囲の抑圧から、胸の内を訴えることさえできない場合さえしばしばあった。

遺族への処遇に対する不満と「犬死」論への抵抗感は、戦争未亡人のなかにも強くあった。それは、すべての戦死を「名誉の戦死」-「犬死」という機軸でとらえる近代国民国家の「常識」を超えた、夫の戦死を「無」にしたいという想いであり、強い戦争否定の感情とともに普遍的な平和的生存権の思想に結びつく可能性を含んでいた。

3

すでに述べたが、本書の3つのテーマは北河氏によってほぼ初めて本格的な研究の鋤が入れられたと述べていい。実証を重視し堅実な分析を重ねた本書は、今後、この分野の研究者にとって必読の書となる。敗戦後についてのこれまでの議論に対しても、再考を促す役割を十分果たしている。かなり丁寧に内容紹介をおこなったのは、これを片手に本書の随所にある個々の資料を吟味してほしいからである。また、その成果のエッセンスを広く共有しなかったからでもある。

以下、いくつかの点で、感想・要望を述べておきたい。

本書は210頁と手ごろな厚さで読みやすそうに見える。しかし内容的には、この倍くらいの厚さがほしかった。本書には、現在の研究状況、当時の時代状況という、背景にあたる部分が相当に省略されている。予備知識なしに、それぞれの背景に位置づけて本書が提示する新しい論点を理解することは、かなり難しい。長大な要約をつくってもなお、私が北河氏の意図を正確

に理解できているのか、はなはだ心許ない。

誤読を恐れつつも、内容に対する要望を挙げれば、まず第1に、文化運動、青年団、遺族・未亡人の3つの相関について言及してほしかった。たとえば復員兵と遺族会、女子青年と未亡人、未亡人の「民主化」や「解放」への期待感など、「戦後の出発」の特徴として挙げられたものの相互の関係が分かれば、より立体的な理解が可能となっただろう。敗戦後の社会と精神状況を、この3つから見ることの意義が鮮明になったのではないだろうか。左翼系の地域文化運動の検討が不十分であるとの指摘はすでになされているが（大串潤児「国民的歴史学運動の思想・序説」『歴史評論』613号、2001年5月）、文化運動が社会運動や労働運動などとの比較によって、位置づけられていない点にも物足りなさを感じた。地域青年は、一方で青年団に属し、文化運動に携わりながら、他方で労働組合に参加し、同じ地域で年長者や遺族・未亡人とともに生活していた。至難の注文であることはよく承知しているが、そうした“総体”を提示することにこそ、戦後の社会と人間の現実の肉迫と追体験という、北河氏が考える「第一義的な問題」（「読者へ」）がかかっているのではないだろうか。

第2に、講和条約締結・独立前後から1950年代中頃にかけて広がったサークル運動・生活記録運動の性格や運動の盛衰の背景と「戦後の出発」との関係について、何か所かで言及はされるものの、まとめて論じられなかったことが残念であった。・章から察するに、北河氏の見通しとしては、文化運動の主潮ではなかった部分や、青年団のグループ制の経験とのつながりを重視しているようである。戦後文化運動を否定的に評価したのが、鶴見和子のようなサークル運動の同伴者であったとの指摘も、これと関係するだろう。しかし、1948年ごろとされる

文化運動が終息する時期と、その衰退に作用したとされる政治・社会状況の説明の時期がややずれていることもあり、そうした時代状況のなかでサークル運動・生活記録運動がなぜ盛んになったのかという問題は、今後の大きな課題として残されたといえる。未亡人問題についても「あとがき」に「わかっていないことがいかに多いかということがよくわかった」と簡単に書かれているだけである。残された課題についても具体的に明記されていれば、本書の理解への大きな助けになったのではないだろうか。

最後に、人名索引・事項索引の添付を望みたい。本書は各地の資料が実に数多く使われている。その収集と分析に費やした労力は相当のものであろうことが容易に察せられる。その労力に比べれば微々たるものだが、本書に散在する同じ団体の資料を比較参照したいときなど、その箇所を探すのにとても手間取った。とりわけ本書のような場合、索引は必須ではないだろうか。

戦中と戦後の文化の連関を重視する北河氏と赤澤史朗氏・高岡裕之氏の編集による『資料集 総力戦と文化』（全3巻、大月書店）も刊行中である。今後一層の研究の進展によって、本書で明らかにされたような、単一ではない“民衆”の「戦後の出発」の特徴が、戦時期、さらにさかのぼって戦前、あるいは逆に「出発」後の動きと、どのような連関を持つのかが見えてくるだろう。本書がそうした研究の流れのなかで生まれた重要な成果であることは間違いない。（北河賢三著『戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、2000年11月、210頁、2200円＋税）

（まつお・じゅんこ 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員）